

I believe your brave heart

常磐 誠

一

卓球は雨でもできるから良いなど、野球部の連中が言っていた。室内練習がダルクてダルクて死にそうだとも。

そういう奴等にはわからないだろうが、実際は卓球だって雨降りの日にはテンションが下がる。わさわさ、パツパツと打つ雨音と湿気に気持ちをやられてしまう。

永杜豪ながもちろうがいるのは、宮ノ訪みやのわ中の体育館ではなく、友人の家の中に作られた卓球場だ。「子ども達よ！ こんなに凄い環境を与えられる僕に感謝すると良いよ！」

と、友人の父親がハッハと笑いながら語るのが、ありがたいとは思いつつも正直うざったい。

「いやそれ自分で言うことじゃないし」というツツコミが即座に入る。さっきの調子に乗った発言をした人の義理の妹で、ゆりがみ百合神望の母親。

豪はいつも通りの軽口の応酬を聞いていて、兄妹の愛情というか、信頼みたいなものを感じていた。

この二人は血が繋がっていないのだから、きつと自分と望の間にだって、家族とかとは違うけれど、友達として、仲間として、信頼関係を築くことができるはずだと思っていた。

自分と望は友達なんだっていう解釈で、

間違いはないと信じていた。

こんな母親を持っているのだから、きつと大丈夫だと信じきっていた。

例え他人に対して一切笑わないような人間でも。

例えクラスで誰一人として話しかけてこないような、そんな腫れ物みたいな奴だったとしても。

きつと俺とは分かり合える日がくる。かれこれ一年以上の間思い続けて来たのに。

一人、オレンジのセルロイド球を左手で一つだけ掴たんでは、たなに乘せて、放つ。雨が天井を打っていて、その音が否応無しに鼓膜を穿って行くのが伝わってくる。三球に一球は狙い通りにサーブが打てない。回転が甘かったり、コースが甘かったり、高さが甘かったりする。

これじゃ打ってくださいと叫ぶようなものだ。あいつなら打ってくる間違いなく打ってくる！ 気持ちだけが、強く心を責め立てる。

そして二十球目に空振った。単純な方が意外と難しい。単純な下回転を掛けるために地面と平行にしたラケットが球に触れることはなく、床のフローリングに落ちた球は豪の膝下四、五センチくらいまで跳ね上がって来て、そして勢いを失いまた落ちて行った。鼓膜をわさわさ刺激する天井の音

が煩わしく思えて、豪はいつの間にか台の向こう側にいる車椅子の男に気付くことができなかった。

「部活サボっておいてやるのがまた卓球ってというのがなんつーか悲しい性分よなあ」

虫取り網に似た、ボール拾い用の網を手にいくつかの球をその中に収めながら瀧中真琥まこが呟いていた。

この人が望の母親である百合神日向ひなたを幼少時に養子として引き取った人の息子、つまり日向から見ても義理の兄だ。

「俺、これ以外にやることもないんで」

短い言葉だけで終わりにして、また豪はサーブ練習に戻る。一人だけでできる練習は限られているが、これは本当に大事な練習なのだ。また改めてカットサーブを放つ、今度は綺麗に切れて、相手コートで弾む二バウンド目から自分側に戻ってくる。また左手に球を掴んだその時に、

「お前もせっかく部活サボってんだしさあ。女の一人くらい連れ込んでよろしくしてたって良いんじゃないの？」

という呑気な真琥の声を聞いて豪は手を止める。

「それじゃ俺が実際にここで女子の一人も連れ込んでよろしくやってたらどうするんですか？」

それだけ言ってから、またカットサーブを放った。今度もうまく切れて、二バウンド目から球は自分側に帰って来て、ネットに触れた。

「そりやもちろん」

真琥は網の中から球を一つ取って投げてくる。豪がそれを受け取ったのを確認してから、

「まずお前に鉄拳の一つもかましてから、その子と一緒にお前の家まで引つ張りそこでお説教さね」

やっぱりそうだろうなと豪は思って、鼻で笑う。

「自分から言っておいて全然認める気なんてないんじゃないですか」

左の掌から放たれるオレンジのピン球は高さ十六センチまで上がる。ルールで定められた最低限の高さ。豪は練習内容をロートスに切り替えて速攻の為のロングサーブを放つ。力の入り過ぎでオーバーしてしまったそれを、真琥は器用に網で掴む。

「僕にバレなきゃ良いんじゃないかな」

真琥の声は、どこまでも呑気だ。

「実際、日向と猛たけは色々やってくれたからな」

半分笑い、そして半分呆れた様に真琥は望の両親の名前を引き合いに出した。

日向は瀧中家に引き取られてすぐに、家が隣同士で同じ年だった猛と仲良くなり、幼馴染として一緒に過ごして来たという。

そんな二人は今でも二人きりで頻繁に出かけていくような夫婦になり、豪もよくそんな二人の年甲斐の無い——とは流石に本人達には言えないが——話を聞く。

「じゃあ望の両親は真琥さんにバレないでデートしてたりとかよくしてたんですか？」

と試しに聞いてみた。

「いんやあ。色々と策を弄しては二人で出かけようとしてくれたけどね。殆ど僕と、あと梓あずさにバレて説教をくらうことの方が多かった」

昔を懐かしむ様にして真琥は微笑み、言った。三人の子供の命と引き換えに逝ってしまった妻、梓の名前を出す時に、どうしても堪えきれず一呼吸置いてしまう癖もいつも通りで、名前を出す前の一呼吸で、豪は常に梓という名前が出るタイミングを正確に測ることができた。これは恐らく他の人間達も、きつと同じだろうとも思った。

……望も？

何故だかそれだけは当てはまらないような気がした。

「本当に真琥さんが二人の計画を狂わせてたんですか？」

自分が望のことを気にしていることを悟られたくなくて、豪は妙に顔をにやつかせて、問うた。

「そりやもちろん。……悪い嘘だ。梓がいなけりや三割も止められなかつたろうな」

真琥が笑うのに合わせて、豪も笑う。そりやそうだろうなあ。だって、単純だもん。真琥さんは。そう思った。そのにやつきを見た真琥は顔を赤くして、

「うるせえ！ 何笑ってんだコラ。せつせと練習せーや！」

と、球を上から投げつけながら怒ってくる。それが照れ隠しによるものなのは口調や態度からすぐわかった——そもそも、本気の真琥さんの怒りはこんなもんじゃない——。

ピン球は上投げでは軌道が安定しない。途中からふらふらと失速した球は、全く見当違いの方向へと飛んで行ってしまった。

「あーあ。後で拾っててくださいよ」

豪は左手側に置かれたボール台から球を一つ取って、またロングサーブの練習に戻ることにした。

しばらくは二人とも無言だった。豪は自分の出せるサーブ全てを一通り確認し、練習しきることができて、そろそろ球出しマシンを用意して多球練習へと入ろうと、マシンのある方向へと足を向けた。その時だった。

「水分補給は重要だぞ」

後ろから声をかけられて、自分の水筒が放られた。急に声をかけられた格好になった豪は、それほど勢いもついていなかったはずのその水筒を上手く捕まえられず取りこぼしてしまった。蓋の閉まっているペットボトルから中身はこぼれないが、凍っていたのが溶けると同時に外側に発生する水滴がペットボトルを包んでいたハンカチを通り越して床を濡らした。そこを踏まなければ影響はないだろうと思いい、豪は卓球台にかけられた雑巾を一つ手に取って、早くその水分を拭き取った。

「今のが取れないって、卓球で前陣速攻やってる奴の動きじゃねえや」

真琥の声に豪は舌打ちして振り返った。真琥の顔から読み取れる感じは、いつもの軽口、という感覚でしかなかった。

残ったのは、自分が思い切り舌打ちをってしまった事実だけ。居心地が、悪くなる。

「すみません」

出たのは、その言葉だけだった。

「いや別に。だってそうだろうなと思ったから」

真琥のこの言葉を聞いて、ああ結局してやられたのだ、と豪は悟った。

「お前まだ気にしてんだろ」

「……………」

真琥の問いかけに対しては、何も答えられなかった。沈黙を続けても、天からの音ももう耳を穿たない。いつの間に雨は止んだのか。沈黙もまた耳に痛い。嫌気がさしそうだった。

「ただいま。やっぱりここにいたんだ。豪」
その声を放ったのは、真琥の子供の一人、椿だった。

椿、という花には劣るが、赤みのついた髪の毛をポニーテールにまとめている。椿も豪や望と同じく卓球部に所属している訳なのだから、今ここに椿がいるということは豪がサボった部活はもう終わっている、ということなのだろう。

「……望は？」

豪は望の様子を聞いていた。一言声を発しただけの豪に対して椿は、横目で見ているだけの真琥にも伝わる程の嫌気をその目に纏わせて返事を返してきた。

「知りたいなら自分で見に行ったら？」

それが嫌だから聞いたんだらうに。真琥が分かり易く肩をすくめる。

「ここには来ない。ランニングに行った」

椿は自分の鞆を部屋に置いて、着替えるのだらう。その言葉だけを残して卓球場か

ら消えて行ってしまった。

「椿はいつも通り手厳しいこって」

真琥は少しだけにやけたようにして視線を豪に移す。もう全て知っているのだから、何かを誤魔化したりしたところで無駄なのだろう。

「というか、俺としては真琥さんが俺のサボりについて何も言わないのとか、すっげえ不思議なんですけどね」

「そりゃあ知ってるからね」

どうということはない。真琥の返事から読み取れるその感情。豪はそれに救いのようなものも確かに感じてはいた。

真面目に練習をしていたとしても、そもそも学校の部活に参加しない時点でそれはもう真面目ではないのだ。自分でもわかっている。望と顔を合わせるのがたまらなく嫌だった。クラスでも、満足に顔を合わせたりするどころか、話題に出すことすらも内心嫌気が差してしまっていた。

そういうことを自分でも疾しく思っているとどこだというのに、それをまた上からガミガミと言われてしまうことだけは避けたいと思っていた。

室内で筋トレでもするかと思いつながら帰っているとき真つ先に見つかり卓球場まで通された。何かしら自分と望との間について知っているなら知っているで、小言なり説教なりがあるかとも思ってたビクビクもしていたのだが、本当に、全く、これっぽっちもそれに当たるような発言は真琥の口から発せられないまま、今まで自分は集中してトレーニングができた。ありがたいことだ

と思っている。

もしかすると、そういうことについても椿は俺に対して怒っているのかもしれない。そう感じはしたものの、態度だけはいつも通りだ。さつき真琥さんが言った通り、いつも通りなのだ。本当にそこに対して椿が怒っているのか、いや、そもそも、椿は俺に対して——それと、きつと望に対しても——怒っているのかどうか、全く読めなかった。

「何で知ってるんでしょかね」

豪は真琥に対して率直に質問をぶつける。「いやな、実はああ見えて案外椿はおしゃべりなんだ。ぺらぺらぺらぺらと、それはもう、お父さん聞いてよ！　ってなあ感じで……」

真琥は饒舌な感じで語りだしたがその途中で、

「冗談は口とそのブツサイクな顔だけにしてくれる？」

という椿の言葉に遮られてしまった。

「っーちゃんサイテー」

やれやれと言わんばかりの真琥の態度を無視する椿は、緑色の夏服から、濃い赤色のウインドブレーカーに変わっていた。

真琥という人はこういう時にいとも簡単に、わかりやすくはぐらかす人だ。そういうことは、付き合い始めて一年しか経っていない豪にでもよくわかる。

「いやねえ、お前らが保護者であるこの僕にちゃんと話をしないからこういう風に僕は影でこそそそと事情を知ってる人にあたって話聞いたりそれをまとめたりとか、

色々やってやらんといかんだぞ？　わかっているのかな？　君たちは」

呆れ顔をしながら事情を知ったいきさつを説明する真琥に対して椿も呆れ顔で、「ああわかってるさ。そして私たちはそうしてくれと一言も頼んでない」

呟く様にして、真琥に言った。

「でもお前も無関係じゃない。そしてお前は僕の娘だ」

この言葉だけは先ほどまでのおちゃらけた雰囲気は抜けた、強い言葉になっていた。

「そういうのをさ」

椿はそれだけをまた呟くように言ってから、その後真琥の顔を睨んで続ける。

「自己満足。って言うんでしょ。それとも過保護？　どっちにしたってバカがやること」

椿は卓球場を出て、玄関のある方向へと向かって行った。どこへ行くつもりだ？　という真琥の問いに対して、走ってくるだけ！　と、椿は最後までつかつかって行くような口調で出て行くこうとしていた。

「そうか。行ってらっしゃい。気をつけるよ。……それと、晩飯までには帰ってこい。具体的にはあと一時間だ」

真琥が最後に発した言葉に、椿は返事をしないまま玄関を閉めた。

「……………」

真琥がしばらく黙り込んで両の目を閉じているのを、豪は黙って見ていたが、それだけ見ても仕方が無い。そう思った豪は多球練習を始めた。真琥さんは晩飯の準備に取りかかったのだろう。ガスコンロの

火が点いた音や肉じゃがの、自分の家のそれとどこか違う匂いが、所謂他人である自分が一つの家に厄介になっている、という感覚を加速させるようだった。

これで良いのか。ざわつきを覚える。胸の中で、脳みその中で焦げ付く感覚に、一瞬だけ肉じゃがが焦げてるんじゃないか、とかそんなことが気になりだし、そして、すぐにそんな訳がないと気がついては、バカバカしくなる。

「……で、お前いつ帰るの？ まさか晩飯うちで食ってく気か？ 準備してないぞ。流石にそこまでは」

呆、^{ほう}としていた豪はいきなりの真琥の言葉に慌ててしまった。いつも気配無く現れる人だ。

「え？ あ、ああ。そっか。もう、そんな時間つすよね。そうでした。ありがとうございます。ございました。……あ、マシん片してねえや」
「ああ、それは良い。どうせ椿が食後の運動、とか何とか言って触るだろう。もしかしたら、望もな」

真琥はそう言って卓球台の足にかかっていた豪のタオルを手に取り豪に渡す。望の名前を出したのは、わざとだろう。

「今日はいつもより疲れた」
豪はそのタオルを受け取るのと同時に、つい口に出してしまっていた。一体何に疲れているのかすぐにはわからなくて、それでも考えるのは嫌だった。疲れているから考える必要があるのか、それともどうしたってその行く先に望がいることを悟っているから考えない様になっているのか。自分で

もわからないで今までを過ごして来てしまった。

「そしたら、すみません。今日はありがとうございました。帰ります」

その考えを打ち切りたくて、そう言葉にした。

「ん。感謝されるようなことは何もしたらんが、帰ってゆっくりしな。来たい時にはいつでも来い」

真琥は玄関まで豪のことを、最後は笑顔で見送った。ありがたいと思う反面、もういっその事、当事者である自分に問うてくれた方が自分にとっても楽な気がしてしまった。なのに、それでもいざ実際に聞かれた時のことを考えたら、やっぱり気が重い。そんな矛盾した気持ちを抱えたまままで門を開けると、

「私が走り終えるくらいにはのんびりしていたんだな」

丁度住宅地の外周を走り、帰って来た椿と鉢合わせた。

悪いかよ。豪が聞くと、ああ、悪い。椿の声は素早く、鋭く豪に跳ね返ってきて、それに豪はたじろいでしまった。

「そんなにのんびりしてられるんだな、って意味だ。誰がそういうことを言うかっていえば、……言わなくともわかるよな」

椿はまるで畳み掛けるようにして豪に言葉をぶつけてくる。

「うるせえな！ じゃあどうすりや良いのかお前口出せんのかよ！ ……どうすれば良かったのか言ってみろよ」

後半やや冷静さを取り戻しながらも、豪

は怒りを初めて露にした。けども、椿はまるでそれを意に介さない様子で、

「どうしてそれを私に聞く。何で私がそれに答えないといけない。お前のパートナーは望で、チームメイトは男子卓球部だろ」

「そのあいつのせいで、望のせいで今の卓球部の雰囲気は乱れてんじゃねえのか。俺が悪いのか？ なあ。お前も見てただろ。

あれは俺が悪いのかよ。俺が悪いって、お前言いたいのかよ」

一息に椿にぶつける言葉。自分よりずっと華奢な女子の体でしかない椿に、学年でもずっと体の大きい豪がこうした態度をぶつけるのは異常なことだと、頭の片隅で豪は理解できていた。それでも、それでもまるで椿の態度はその通りでしかないと言っているように思えた。悪いのはお前なのに、逃げてるんだと指摘しているように思えた。事実、

「正解。お前が悪いんだよ。もう気付いても良い頃だと思っていたけどな。けど気付かないんなら別に良い。実際、お前は負けたんだ。それ以外に何か結論があるか？」

椿の言葉はこうだ。自分の顔を見上げ睨む視線の持ち主を、自分よりもずっと非力な女子を、衝動的に殴りつけてしまいそうになる。ヒリヒリとする腕と、そして気持ちをどうにか抑え込んで、

「何に気付く頃だった？ ああ、確かに俺は負けたさ。でも、だから何だったんだよ！ あいつが変わるっていう手は無いのかよ」

自分の中では冷静に、できる限り冷静に言葉を選び、問うている。と豪は思った。

その一方で豪は、ああ、俺もあーなりてえなあとも思った。自分の思う通りに事を進められる力があるってのは、さぞかし気分も良いんだろう。イライラだけが募るようだった。夏服に、汗が滲む。ジメジメした湿気が、むき出しの腕を伝って降りて行く。

椿の言葉。睨むその目を逸らして放たれる言葉はいつにも増して冷淡だったように豪には感じられた。

「さあ。望がああなのは今に始まったことじゃないし。けど、そろそろ知るべきかもね。私はそう思う。望は変わらない。どうせ」

そこにあるのは諦めでしかない。望という人間に対する諦め。手が届かない。気持ちはその間に一生届かない。そんな気持ちだけが汲み取れた途端に、豪の足は止まり、椿の走る足は早くなる。

結局はそういうことなのか？ 置いて行け、ということなのか？ 望というお荷物を置いて行けば、悩まずにいられるのか？ ……強く、なれるのか。置いていかれた豪に、最早答えを教えられる人間はいないと感じられた。夏だというのに、寒気がする。どうして。…何故？

家に入ってから、豪は声をあげることができなくなっていた。ただいまの一声も、のどからか細く出て、震えるようだった。

…泣いているんだろうか。自分の体なのに、それすらもわからなかった。親に、そんな様子を見せるのがたまらなく恥ずかしくて、そのまますぐに部屋に籠もってし

まった。答えは出ないまま、わからないまま来てしまった。

椿の声が何度も、何度も聞こえる。

知っているのだろうか。椿は俺にそろそろ知るべきだと言った。一体、何を俺は知るべきなのだろうか。嫌な想像ばかりが働く。

望は変わらない。

強いまま、変わらないのだ。

まさか、俺は望より弱いのだと悟れという意味なんだろうか。諦めろというのだろうか。布団にこもる体に、嫌な汗が伝い続けて、寒気がしてくる。なのに、体は妙に震え続けるみたいになって、動いてくれない。そして、聞こえ続ける。

椿の言葉が、いつの間にもまた降り出したのか、耳に張り付く雨の音と緋い交ぜになって自分の胸に纏わり付いて、拭い去れなくなってしまうことに気付いた豪は一人、寝苦しい湿気にも似た諦めの気持ちに絡めとられるような不安に包まれていた。

〈了〉